

## 観能のいざない

舞囃子 融 (とおる)

かつての源融の邸宅、京都・六条河原の院を訪れた僧の前に、融の大臣（おとど）の霊が現れ、月の光に照らされながら優美な舞を見せる。

舞囃子というのは、能の見せ場となる場面を抜き出し紋付袴姿で舞って見せるもの。

狂言 狐塚 (きつねづか)

主は、太郎冠者に鳴子で狐塚の田の鳥を追い払うように命じ、また、狐塚には悪い狐が出るらしいから用心するよう言いつける。主は、一人では心細かろうとあとから次郎冠者も行かせ、その後二人を労（ねぎら）おうと自分も狐塚へ行くが、太郎冠者は二人を悪い狐と思い込んでしまう・・・

能 弱法師 (よろぼし)

河内国高安の里に住む左衛門尉通俊が登場する。人の讒言（ざんげん）を信じて息子の俊徳丸を追い出してしまったので、不憫（ふびん）に思い、天王寺で一週間修行を催しているところであると言って座に着く。（天王寺には悲田院と呼ばれる施設があり、乞食や病人が集まっていた。）

そこに盲目となり、弱法師と呼ばれるようになっていた俊徳丸が盲杖（めくらづえ）をつけて登場する。弱法師は左衛門の修行を受け、聖徳太子が建てた最古の寺とも言われる天王寺の来歴を物語る。左衛門は弱法師が、かつて追い出した自分の息子であることに気付くが、人目も憚（はばか）られるので、夜になったら打ち明けることにする。やがて日が沈む時刻となる。折しも春の彼岸の中日、太陽が真西に沈むこの日に、天王寺の西門・石の鳥居を拝むことが、日想観（にっそうかん・能では「じっそうがん」）として信仰を集めていた。また、天王寺の西門・石の鳥居は、極楽浄土の東門に続くとも言われていた。二人は日想観を拝み、弱法師はかつて目にした難波の景色を心に浮かべ、その景色が今も目前に広がっているかのように舞い遊ぶが、人にぶつかってよろよると倒れ、人々に笑われる自分の姿を恥じ、泣き伏すばかりであった。やがて夜も更けたので、左衛門は弱法師に父であると名乗り、弱法師は驚き恥じ入りながらも、二人で高安の里へと帰っていくのであった。

(宝生流職分 佐野玄宣)